

シラバス関連項目群と実質満足項目群の落差が持つ意味

都市教養学部 人文・社会系 社会学コース・教授
宮台 真司

以下に、FD委員会と教務委員会・基礎教育部会が実施した2007年度後期における「都市教養プログラムの授業評価」[SE=学生による授業評価、TE=教員による授業評価]の結果概要を紹介する。

【調査対象・回収率・質問項目】

SE [学生による評価] の回収率は、対象授業70クラス中、88.6%の62クラス。対象登録者8727名中、49.5%の4320名である。TE [教員による評価] の回収率は、対象授業担当教員94名中、66.0%の62名である。

SE [学生による評価] の質問は以下の通り。本レポートで使用する略称も併せて掲げる。TEの質問項目は、SEと同一の焦点について、教員側の自己評価や、学生の態度を観察した評価を尋ねている。**問9以降は都市教養プログラム独自の質問項目である。**

回答は「強くそう思う・そう思う・どちらとも言えない・そう思わない・全くそう思わない」から選択。順に5・4・3・2・1の点を与えた。なお問5は「4時間程度・3時間程度・2時間程度・1時間程度・ほぼ0時間」からの、問10は「易しかった・やや易しかった・どちらとも言えない・やや難しかった・難しかった」から選択。同様に点を与えた。

- 問1 私はこの授業に意欲的・積極的に取り組んだ [態度]
問2 授業の目的を意識しながら学習することができた [意識]
問3 教員の説明はわかりやすかった [説明]
問4 教員は学生の質問・意見に対し適切に対応していた [対応]
問5 授業時間以外で一週間に平均どのくらいこの授業に関連した学習をしたか [時間]
問6 成績評価方法について十分な説明があった [成績]
問7 シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた [成果]
問8 私はこの授業を受講して満足した [満足]

- 問9 この授業の選択に当たりシラバスは役立った [シラバス]
問10 この授業の難易度はあなたにとってどうか [難易度]
問11 この授業を受講して、自分の視野が広がった [視野拡大]
問12 (担当教員の自由設問項目、TEについてはなし)

【学生一人一人をサンプルとした平均値】

数値の項目間比較に意味がない問5 [時間] と問10 [難易度] を除き、SE [学生による評価] の回答平均は全項目で3以上4未満である。高い順から並べると、視野拡大3.63、説明3.59、満足3.58、対応3.44、成績3.34、シラバス3.26、成果3.24、意識3.23となる。

ここで興味深いのは、**値の低い [シラバス] [成果] [意識] が全てシラバス関連と呼べる項目 (シラバス関連項目群) である**ことである。対照的に、値の高い [視野拡大] [説明] [満足] は、シラバスとは関連しない、授業内容に対する実質満足に関する項目 (実質満足項目群) である。

シラバス関連項目群の値が低いにもかかわらず、実質満足項目群の値が高いのである。厳密な相関分析はなされていないものの (次節のデータにはこの点を補う機能がある)、**シラバス関連項目の充実が、授業への実質満足項目の充実と、比較的無関連であることが予想される。**ここには二つの解釈が可能であるだろう。

一つは、シラバスの充実が単なる形式問題に過ぎないという可能性である。この解釈が正しいのならば、**学生の実質満足に関係のないところで形式的な気休めに淫するより、実質満足を上昇させる工夫をした方が合理的だ**ということにもなり得よう。

もう一つの可能性は、シラバスに**意味があるような高**度に**構成的な**——例えば半期分15回が緊密に連結し合うような——**授業が少ないという可能性**である。満足度は高いものの、シラバスと緊密に連携させる方向が模索され尽くしていないという可能性である。

【満足度別の平均値】

次にSE・TE双方につき、問8〔満足〕の5段階評価で1・2・3と回答した者を「満足群」、4・5と回答した者を「非満足群」とし、各々について問8以外への質問への回答平均値を比べた。

満足群は全質問に肯定的回答を、非満足群は否定的回答を寄せる傾向がある。前回述べた通り「満足する者ほど肯定的回答を寄せる」は「肯定的回答を寄せる者ほど満足する」とも言い換えられ、因果的関連というより意味論的なトートロジー（非独立性）であり得ることに注意したい。

さて、ここでもシラバス関連項目について前述した問題が見出せる。SEについて、満足群と非満足群の開きが少ないのが〔シラバス〕0.80、〔成績〕0.72、〔対応〕0.72で、開きが大きいのが〔説明〕1.02、〔成果〕1.01、〔態度〕1.00である。

TE〔教員による評価〕についても、同じことを見ると、満足群と非満足群の開きが少ないのが〔シラバス〕0.27、〔成績〕0.48であり、開きが大きいのが〔態度〕0.87、〔成果〕0.83、〔説明〕0.70である。

〔成果〕の質問（シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた）については、回答の焦点が前段（シラバス通り！）にあるのか後段にあるのか（獲得できた！）で解釈が微妙だが、全体としてシラバス関連項目群は満足度への関連度が低い。

事前・事後の説明責任を遂行するという観点からすれば、シラバス関連項目群に相当する授業側面の充実が求められるのは合理的であるが、学生の実質的な授業満足度を上げるといふ目標から見れば、さして有効な手段ではないということなのかもしれない。

また前回は指摘したところであるが、SE〔学生の評価〕について見ると、問10〔難易度〕についての回答は満足群と非満足群の間に殆ど差がない（0.31）。講義が難解だったから不満になるという傾向は殆どないのである。学生の満足は講義の安易さによると言えない。

TE〔教員による評価〕についても同様に見ると、問10〔難易度〕についての回答は満足群と非満足群の間に差がない（0.03）だけでなく、問9〔シラバス〕についても差が小さい（0.27）。これも前述したシラバス問題の系列に属する解釈が可能であろう。

【系列による平均の差】

数値の比較に意味のない——あるいは他とは意味が異なる——〔時間〕と〔難易度〕を除く全項目で、人文・

社会系の学生たちは、他系の学生たちに比べて、全項目で肯定的回答が多いという結果になった。

〔対応〕〔成績〕〔成果〕〔満足〕〔シラバス〕〔視野拡大〕の項目では法学・経営・理工・環境・SD・健康・その他（都市政策・科目履修・都立大生）をおさえて肯定的回答が最も多く、〔態度〕〔意識〕〔説明〕については健康（健康福祉学部）について二番目に肯定的回答が多い。

人文・社会系の学生だけが優秀だとか動機づけに満ちていると見做すべき理由がないので、以下のように解釈する他ないだろう。学生たちが所属系列によって提供される都市教養科目を受講しがちだという前提にたてば、**人文・社会系の学生たちが受講しがちな人文・社会系提供の都市教養科目は、他系が受講しがちな理工系や法学系などが提供する科目に比べ、授業難易度を含めて専門性が低く気軽に受講できるから、というものである。**

これは、採用人事等においてGPA（グレイド・ポイント・アベレージ）化が進みつつある中で要求される、いわゆる「単位の実質化」とりわけ系列間の公正化という観点から見た場合、都市教養プログラムの枠を超えて、若干危惧される問題を含んでいえるだろう。

その意味で、少なくとも都市教養プログラムの枠内においては、とりわけ**人文・社会系による提供科目について、他系に比べてもさらに意識的な「単位の実質化」への取り組みが要求されている、と言えるのかもしれない。**

【クラスデータとTEデータの比較】

ついで、各質問項目について、各クラスごとにSE〔学生による評価〕の回答平均値を四捨五入したデータ〔以下、学生評価〕と、各クラス担当教員によるTE〔教員による評価〕の回答値のデータ〔以下、教員評価〕とを、比較したところ、興味深い知見が得られた。

学生評価と教員評価のギャップが小さい項目は〔満足〕0.01、〔態度〕0.21、〔視野拡大〕0.36であり、逆に、学生評価と教員評価のギャップが大きい項目は〔シラバス〕0.81、〔意識〕0.64、〔成果〕0.53である。なお、全項目で教員評価の方が高い。

このレポートで先に使った言葉を再び用いるならば、**実質満足項目群においては、学生評価と教員評価のギャップが小さいのであるが、シラバス関連項目群においては、学生評価が教員評価を大きく下回っているということである。**

分かりやすく言えば、シラバス関連項目群については、教員の努力が報われていないように見える。教員がシラバス関連で行なっている努力の自己評価が学生の受けと

め方から乖離している。努力が空回りしているかのような印象を与えるのである。

一つには、教員の主観にもかかわらず、客観的にはシラバス関連の取り組みに教員の力不足の面がある、という解釈があり得る。もう一つ、シラバス関連の取り組みを精緻化しても、そもそもそうした側面に学生たちが敏感に反応しない、という解釈もあり得る。

あるいは、両方を結合するならば、そもそも学生たちが敏感に反応しにくいシラバス関連の取り組みについて、学生たちの反応を目に見えて向上させるためには、まさしく尋常ならざる教員側の努力が要求されるのだ、という解釈もあり得るだろう。

【まとめ】

実は前回のレポートで分析した2007年度前期のデータにも潜在していた問題であるが、シラバス関連項目群（〔シラバス〕〔成果〕〔意識〕〔成績〕）と、実質満足項目群（〔満足〕〔説明〕〔態度〕〔視野拡大〕）との間で、興味深い関係が見出された。

第一に、シラバス関連項目群に対する学生たちの反応が改善されても、実質満足項目群に対する学生たちの反応の改善に結びつきにくいことが、データから推察された。

第二に、シラバス関連項目群は、実質満足項目群に比べて、教員の（主観的な）努力が学生たち目に見える反応の改善に結びつきにくいことが、データから推察された。

こうした推察が妥当なものだったとして、それが、シラバス改善への取り組みをより積極化すべきことを示すのか。逆に、シラバス改善への取り組みは単に説明責任上のアリバイに過ぎないのであって適当にやり過ごせばいいことを示すのか。議論の余地が残った。

ちなみに、SE〔学生による評価〕の自由記述をつぶさに見る限り、シラバス関連項目群に関しては、クレームどころか、言及さえ、極めて稀であることが分かる。そのことが何を意味するのも、検討の余地があろう。